



幾世代をも経て堆積した記憶を、過去の腐葉土とし、そこに現在を生かし、未来の培養基となる糧を見いだす。そして本書を行動への処方箋というよりは思考への誘いたるべく構想し、読者に自己認識のための手掛かりを提供しようとの希望を託す。

「人景」の系譜学

選話たぶりの事件史的記述と、原論論集の記憶とが縦横に繰り返された、この大著の森(第一部)と水流(第二部)とを巡って、よかのように、人間の傲慢をあき笑うや、第二部「雪山」に登頂しようとするあたりから、人景(第三部)に、「極微の巨大

喪失の記憶に抗して

ここに描かれたのは、いわば「風景(landscape)」の生成に尽力した「人景man」を、著者は忘れず描き出す。だがしかし、著者は喪失の歴史を感傷ととも描こうとする名称であった。そうした図と地をなす相互依存の細部を、著者は忘れず描き出す。だがしかし、著者は喪失の歴史を感傷ととも描こうとする

翻訳の風景に

山宏は、いかにもこの大仕事を染しんでいる。「目のなかの劇場」で自ら素描したヒックチャレス趣味から崇高の美学への展開が、シャーマの大著で細部豊かに増幅されているところにとまらぬ。膨大な情報量(雑多な文に圧縮しつつ悠揚せよめ)の調議を導き、連想を委ねた本、ぼくに出会えて、本館しりと重い原書初版本を購

るべく構想し、読者に自己認識のための手掛かりを提供しようとの希望を託す。ここに描かれていない風景。一方で本書は沙漠の乾いた風や、アフリカのサヴァンナや「因奥への旅(ヴァン・デル・ポスト)へと読者を誘うことほしない。また水流の隠喩学は縦横に開陳しながらも、北極や南極への探検旅行が齎らした低温と氷山の体験は待程を延ばさない(谷田博幸「極北の迷宮」)。アルプスの水河形成史に関するウイオレ・リュックとラスキンとの論争に視野を限定した世界も、本書があくまで(新井は含めて)西欧世界の風景に拘泥した証拠と言えるだろう。

十年の歳月

とはいえ、いかにも高山宏好みの読書案内や注は完訳。下手に真似れば火傷は避けらぬ。思えば、翻訳があるべき原書刊行直後の一九九五年、しつこく鑑として、原書(ハの真面目だが、そのフランス古典主義絵画の画面に蛇状の道筋を読み取る論者の眼力。一見しつこく歴史的な背景が、すがめつ吟味賞断したい。この厚さで内容では、日本語に訳される日など、未来永劫日本文化研究センター教員、総合研究大学院学教授、

慧眼にも提案する。新境地を拓く。クレウアスに落ちて窮地を脱すべく懸命に身悶える自分の眼前を、アプとハサミシが悠然と歩いて行く。人間の傲慢をあき笑うかのように、この述べは、ウィリアム・ターナー描き「ハニバル」に、「極微の巨大

そのした男性的妄想の悲喜劇の傍らでアルプスの女王と劇で輝きだしたアンリエト・タンジヴェルが、自分より三十年前に女性としてジャモニーに初登場したマリ・パラティに「姉事 する出合いと別れの場面は、淡淡とした叙述ながら思はず涙を誘う。そしてアルパート・スライ、このヴァクトリア朝は、モこのフアン登頂以前から先刻書き上げていたと思いき、架空の偽造登攀記に、デオブマ仕掛けの講演会を添付横行して大当たりを取り、トマヌ

幾世代をも経て堆積した記憶を、過去の腐葉土とし、そこに現在を生かし、未来の培養基となる糧を見いだす。そして本書を行動への処方箋というよりは思考の誘った

た日を、今に思い出す。爾來十年の今日、原書者に書かれた語を満喫させるに足る日本語に訳出された。その幸福を噛み締めつつ、貴重な時間が投入して事業にあたり、関係者の労を多とするなにか、いかにも月並みの慣習句をあげつつ思は犯すま。この二十年で書店の文化の棚の様相を一変させた訳者が、周到なる選球眼の記述が、技術上の都合からだろう、その異才を縦横に發揮する場が(ハバ、M・スタ、か、この二葉の地形図だが、日本語訳書からは脱落した。並ぶ「風景と記憶」の翻訳という大業の外には容易に得られないとすれば、それは日本文化がその風景の記憶に留めおくべき、このうえもなく賢いかな不手ではないたろう